

令和 2 年 4 月 11 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K00763

研究課題名(和文) 幼老統合ケアを活用したアロマザリング育児に関する生活科学研究

研究課題名(英文) A Study of Life Science on Allomothering Care using Intergeneration

研究代表者

中井 孝章 (NAKAI, TAKAAKI)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授

研究者番号：20207707

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)： 一般に、子どもは母親に見守られながらも、様々な人たちとかかわる中で母親との関係から距離をとることで、身体的にも精神的にも成長を遂げていくものである。ところが、母子が過剰に密着した状態で子どもの健やかな成長が阻害されている。そこで、子どもは多様な人間関係の中で育つという考え方に立ち返り、母親以外のアロマザリング育児が注目されてきた。子どもは、家庭で私人として親と居る時と、保育園等で公人としてアロマザーと居る時では異なるモードにある。本研究は、多種多様なアロマザーズが各々子どもに、どのような子育てをしているのかを調査しつつ、アロマザリングに基づく新たな子育てシステムを構築することを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、母親(特定の養育者)が家庭で子育てを行うマザリングと、母親以外のアローマザー、特に保育士が乳児院やこども園で行うアロマザリングとの差異を、各々の保育現場での観察を中心とするフィールドワークを通して、解明したことにある。とりわけ、3歳未満の乳幼児がマザーとアロマザーへのかかわり方の相違を観察することで、3歳未満の乳幼児に対しては、マザリングが不可欠であること、すなわちアロマザリング育児では不十分なものとなること、3歳以上の幼児に対しては、マザリングに加えて相性の良いアロマザリングが不可欠であることを解明した。マザリングの意義は、アロマザリングを通して初めて解明できるのである。

研究成果の概要(英文)： Generally, a child accomplishes growth physically and mentally while it is watched by mother by taking the distance from the relations with mother. However, a mother and a child are tight states excessively, and healthy growth of a child is inhibited. Therefore it has been brought back to a way of thinking to grow up in a variety of human relations, and the allomothering child care except mother has attracted attention. When a child is with an allomother as a public person in a nursery school and a child is with a parent as a private citizen at a home, there is a child in a different mode. This study elucidated that I built a new child care system based on the allomothering while investigating it what kind of child care a great variety of allomothers is doing to each child.

研究分野：生活科学

キーワード：マザリング アロマザリング 幼老統合ケア 世代間交流 共同保育 社会的身体論 過程身体 規範身体

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1 . 研究開始当初の背景

今日の子どもの成長発達への機会は、母子関係をベースに、子ども支援施設と学校関係に限定されている。特に、家庭における父親の慢性的不在状況が、母親がわが子を「母子カプセル」の中に閉じ込めてしまい、わが子からさまざまな人たちとかかわり合う過程で成長発達していくという機会を阻害している。ところが、「子どもが育つには 100 人の村が必要だ」といわれるように、子どもの成長発達への機会は、さまざまな人たちとの関係性の中にこそある。子どもは多様な人間関係の繋がりの中で育つのだ。このとき浮上してくるのは、母親以外の個体 (= アロ) による世話を意味する「アロマザリング」である。

こうしたアロマザリングまたはアロマザリング育児は、今日、母親または特定の養育者に課せられたマザリング育児を補完することができるのか。さらには、アロマザリング育児の典型である社会的祖母による子育てでは、血縁関係のない乳幼児や子どもに対してどのような効果をもたらすのか。本研究の背景としては、行き詰まりをみせつつある子育てや子どもの教育に対してアロマザリング育児ができることは何かを解明することにある。いわゆる、アロマザリング育児を通しての、子育てそのものを見直すことが本研究の背景である。

## 2 . 研究の目的

一般に、子どもは母親に見守られながらも、成長する中でさまざまな指導者に導かれたり、同世代・異年齢の子ども同士で遊んだりするなど、さまざまな人たちとかかわる中で母親との関係から距離をとることで、身体的にも精神的にも成長を遂げていくものである。ところが、今日の父親不在社会のもと、母子が過剰に密着した「母子カプセル」の中で子どもの健やかな成長や互いの精神的な成長・安定が阻害されている。こうした状況において、子どもは多様な人間関係の中で育つという考え方に立ち返り、「母親以外の個体 = アロ」による養育を意味する「アロマザリング」という考え方が注目されている。アロマザリングが顕著なのは、子どもは、家庭で私人として親と居る時と、保育園で公人として保育士 (アロマザー) と居る時では異なるモードにあり、保育所では泣かないなど自立していることである。つまり、子どもにとって保育士は母親の代替者ではなく、アロマザーとして独自の養育をしているのだ。本研究は、多種多様なアロマザーズが各々、子どもに対してどのような子育てをしているのかを調査しつつ、アロマザリングに基づく新たな子育てシステムを構築することが本研究の目的である。とりわけ、乳幼児が接する機会の多いアロマザーとして保育士がいるが、保育士によるアロマザリング育児は、母親または特定の養育者によるマザリング育児に取って代わり得るものなのかを解明することが本研究の目的となる。

## 3 . 研究の方法

本研究は、マザリング育児 / アロマザリング育児についての比較研究を通して、各々の育児の役割と特徴を明らかにすることから、次のような研究方法を採った。

一つ目は、マザリング育児 / アロマザリング育児についての基礎研究である。具体的には、進化生物学や進化心理学など進化人間行動学関係の内外の文献を読み、アロマザリング育児の実態を調査することである。この基礎研究は、次に挙げるフィールドワーク研究を実施する以前に不可欠なものである。

二つ目は、マザリング育児 / アロマザリング育児についての、観察と記録を中心とするフィールドワーク研究である。二タイプの育児についての比較研究であることから、マザリング育児については、3 歳未満の乳幼児の居る家庭、約 5 件 (対象児、約 5 名) と、3 歳未満の乳幼児 (主に、1 ~ 2 歳児) の居る乳児院および認定子ども園、2 箇所 (対象児、約 5 名) に対して 2 年半のあいだ、観察を中心とするフィールドワーク研究を実施した。この場合、アロマザリング育児を行う養育者は、主に保育士である。

三つ目は、小規模コミュニティでの社会的祖母によるアロマザリング育児の実態調査である。この場合の対象児は、3 歳以上の幼児および小中学生 (義務教育学校に通う地域の子どもたち) である。この場合の研究の方法は、主に、社会的祖母および主任児童委員 (グランドマザー) へ

のヒアリングと対象児へのヒアリングおよび両者による世代間交流の効果の観察である。

以上、本研究の方法は、一つ目を除くと、3歳児を対象児の分水嶺とした上で、3歳児未満の乳幼児については、一般家庭と乳児院および認定子ども園での観察などのフィールドワーク研究を、3歳以上の幼児と子ども(小中学生)については、(以前から世代間交流を継続してきた)大阪市内の小規模コミュニティでのヒアリングを中心として、比較研究を行った。

なお、本研究は、一般家庭と乳児院および認定子ども園での、観察を中心とするフィールドワークに基づき、様々なデータを収集してきたが、そのデータ群をメタ身体論の立場から相互に関連づけつつ複合的に分析・考察したため、ここでは、抽象度の高い概念を用いての説明にならざるを得ない。つまり、研究成果の段階では、これらのデータをメタ身体論の概念群へと変換した上で、説明する。

なお、採取した個々のデータのうち、主要なものは次の通りである。

- ・ 乳幼児の微笑の頻度と精神発達の関係
- ・ 乳幼児の欲求と養育者のマッチングの頻度
- ・ 乳幼児の特異な行動
- ・ 乳幼児の欲求と養育者のミスマッチングの頻度
- ・ 乳幼児の過剰行動
- ・ 乳幼児の人見知りの状況と養育者との密着度
- ・ 乳幼児の過小行動
- ・ 乳幼児と養育者との相互作用の頻度

#### 4. 研究成果

(1) 本研究は、当初、研究代表者がこれまで推進してきた世代間交流(インタージェネレーション)を活用したアロマザリング育児を今日の社会に根づかせる方向で研究を進展する予定であったが、保育研究者、萩原英敏の論文(萩原英敏、「3歳未満児保育から見た、親子関係が、青年期前後の人格形成に及ぼす影響について: その3 3歳未満児の主たる養育がマザリングではなく、アロマザリングであるという問題点について」、『淑徳大学短期大学部研究紀要54巻』1995年、13-30頁)を契機に、進化生物学などの基礎研究(内外の文献研究)の結果、人間と動物の共通性(連続性)を尺度とした場合、アロマザリングを行う動物がわずか0.1%にすぎないというのが自然の摂理であることが判明した。つまり基礎研究的には、アロマザリング育児を行う動物は、ごくごくわずかな割合にすぎないのである。そこで、萩原は3歳未満の乳幼児に対して、母親(特定の養育者)のマザリングに代替して、アロマザーのアロマザリングを行うことが実現不可能であると結論づけているが、まったく妥当な見解であると考えた。

このように、自然の摂理からすると、アロマザリング育児は例外であり、私たち人間にとってはそれがマザリング育児に取って代わる可能性があるとはいえ、現実的であるとはいえない、むしろ進化論的には自然の摂理に反する可能性が高いことが判明した。繰り返し強調すると、本研究は、アロマザリング育児を促進することを目的としていたが、進化生物学的な知見に沿う限り、アロマザリング育児の促進は慎重であるべきだと考えるに至った。

(2) 前述の(1)からあらためて、マザリング育児/アロマザリング育児についての比較研究を行ったところ、メタ身体論の立場からすると、次のことが判明した。なお、論述の仕方は、一般家庭での母親もしくは特定の養育者(=マザー)のマザリング育児を基準にした形で行い、マザリング育児からみると、乳児院での保育士などのアロマザーのアロマザリング育児には何が欠如しているのか、もしくは、何が十分でないのかというスタイルでの論述とする。

メタ身体論の立場からすると、生まれたばかりの乳幼児の身体は、他の身体と幾度にも及ぶ相互的なかわりを行う中で身体(身)の相互交換(互換)を行うが、それを大澤真幸の概念を用いて「過程身体」と呼ぶ。「過程身体」の段階では、乳幼児が母親になり、母親が乳幼児になるといった身の互換が常態化する。そして、こうした幾度にも及ぶ身の互換を通して、やがて乳幼児は自らの身体を(「第三者の審級」としての)母親の身体へと投射していく。裏を返せば、乳幼児の身体は「過程身体」という発達時期を十分やり遂げた上で、「抑圧身体」へと移行するとき、「過程身体」への固着が起こらず、母親とのあいだに「抑圧身体」が円滑に生成されることになる。母親が乳幼児に対してあまりにも早く(幼いうちから)自立することを要請してしまうと、すなわち「過程身体」から「抑圧身体」への移行が性急過ぎると、かえって「過程身体」への固着が起こる可能性がある。むしろ、乳幼児の身体は「過程身体」から「抑圧身体」へと一方向的に向かうわけではなく、「過程身体」と「抑圧身体」を行き来すると考えるのが普通である。自立礼賛や甘え・依存の禁止などの極端な育児方針をとらない限り、大半の一般家庭では、「過

程身体」から「抑圧身体」へと円滑に移行していく。

このように、母親は、幼児の身体水準を「過程身体」から「抑圧身体」へと時間をかけて移行させることになる。そのことは、家庭乳幼児とはまったく異なる生育環境に置かれている乳児院と比較すれば、より一層明らかになる。集団生活の規則が多い乳児院のような施設では、担当保育士が乳児院乳幼児の身体水準を「過程身体」から「抑圧身体」へと引き上げることは至難の業である。というのも、担当保育士は世話をする乳児院乳幼児に対して、「過程身体」を許容することができず、正反対に集団生活の規則や規範を押しつけ、性急な形で「抑圧身体」へと仕立て上げる可能性が高いからである。ただ、家庭乳幼児においても例外がある。それは、母親がわが子を私物化して、“二人ぼっちの世界”，すなわち自他未分化な「過程身体」の水準で自足させる場合であり、このとき、乳幼児の「過程身体」への固着が生じる。家庭乳幼児といえども、「過程身体」から「抑圧身体」への移行は、必然的な発達過程ではなく、あくまで確率的な事柄なのである。

やがて、乳幼児の身体は、全生活において母親の身体との濃密な互換を通して、さまざまな「超越的身体」と重なり合わせていく。こうした重なり合いの頻繁化・豊富化は、乳幼児に規範の形成を確固たるものとしていく。やがて、乳幼児の身体は母親の身体を「第三者の審級」として投射し、「抑圧身体」の水準へと移行する。ここで「抑圧身体」への移行とは、母親が幾度にも及ぶ身体の互換を通して乳幼児とのあいだに信頼関係を形成した上で、見える超越的身体として「～すべきである」という具合に規範の声を乳幼児に向けて発し、乳幼児がそれを受容する身体を形成することを指す。こうした規範の声によって、ただ存在するだけにすぎなかったモノ（たとえば、玩具など）が初めて意味を付与され、意味のある存在として乳幼児の目の前に立ち現れるようになる。

こうして、乳幼児の身体は母親の身体を通して「抑圧身体」を確立することになるが、それがうまく成立するために、母親は乳幼児から次のことを求められる。それは何かというと、母親は乳幼児がその都度のさまざまな欲求に対し、的確に応えることができるか、正確にはどのくらいの頻度で的確に応じることができるかである。乳幼児の一般的な生活習慣としては、授乳、おむつ交換、睡眠が基本であるが、こうした日々の生活の中で、幾度も反復される「欲求 - 応答」パターンが乳幼児と母親のあいだでうまくいくかいかないか、すなわち乳幼児が泣いているとき、そのサインはお腹が減ったのか、眠たいのか、おむつを代えてもらいたいのかなどを母親が的確に判断し、迅速に対応できるか否かは、蓋然的な事柄なのである。育児とは、乳幼児のその都度のさまざまな生得的な欲求に対して迅速かつ的確な対応を行うといった気の遠くなるような反復の営みなのだ。端的にいうと、母親からみて育児は回数、すなわち乳幼児の欲求にどれだけの頻度で的確な応答ができたかに収斂する。

近年、社会の複雑化とともに、育児過剰としての虐待、育児過少としてのネグレクトが多くなりつつあるが、あまりの度重なる育児の失敗は、母子関係（親子関係）の破綻につながる。また、母親が乳幼児の欲求に対する的確な応答の頻度があまりにも低いとすれば、日々の低調な母子関係が原因となって虐待やネグレクトを二次的に生み出すことも多々あり得る。こうした場合、乳幼児における「抑圧身体」の擬制が遅延するその一方で、「過程身体」の水準もしくは「過程身体」と「抑圧身体」との途上が長期化することになり、結果的に乳幼児の身体は、母親による「抑圧身体」の擬制を拒絶することになる。とはいえ、大半の乳幼児は、いつも世話をしてくれる母親を通して自らの身体を「抑圧身体」として形成していく。繰り返すと、家庭の乳幼児においては、「過程身体」から「抑圧身体」への移行が極めてゆるやかにかつ順調に成されることから、規範の準拠点となる「抑圧身体」を円滑にかつ自然に受けいれるのである。

以上のことから、本研究においては、マザリングの最大の役目は、乳幼児の身体を「過程身体」から「抑圧身体」へとゆるやかに引き上げつつ、その過程で社会的生活を営む上で不可欠な規範を習得させることであることが判明した。ところが、保育士などによるアロマザリングは、3歳児未満の乳幼児を「過程身体」から「抑圧身体」へと移行させることは困難であることから、マザリングに取って代わるできないことが判明した。こうした観察結果は、「アロマザリングを行う動物がわずか 0.1%にすぎない」という進化生物学的な知見と符合している。むしろ、アロマザリング育児は、世代間交流実践の成果からわかるように、3歳児以上の幼児や子どもに対してのみ顕著な効果がみられることがあらためて判明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計5件

1. 著者名 中井孝章	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本教育研究センター	5. 総ページ数 105
3. 書名 ケア論 マザリング/アロマザリング	

1. 著者名 中井孝章	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本教育研究センター	5. 総ページ数 100
3. 書名 ケア論 キュア/ケア	

1. 著者名 中井孝章	4. 発行年 2018年
2. 出版社 オーエム	5. 総ページ数 208
3. 書名 ケアとしてのマザリング/アロマザリング	

1. 著者名 中井 孝章	4. 発行年 2018年
2. 出版社 オーエム	5. 総ページ数 214
3. 書名 インタージェネレーション・ベースド・アロマザリング	

1. 著者名 中井 孝章	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本教育研究センター	5. 総ページ数 127
3. 書名 露呈としての学校 表象としての学校	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----